浮牡丹全傳 三

特
ハ13
186
3

小說牡丹傳

三

欣
186
3

浮牡丹全傳 卷之二

鳳来堂蔵

東京帝國大學
へ13
186
3

小説浮牡丹全傳巻之二

江戸　山東京傳　編

第三回　辟邪鈕號

愛よ又豹太夫ヶ一子磯之丞へ学文武藝と修行の為。三年前家僕弓助
といふ者と具して都よのぼり。洛外山崎よ寓居して主従只二人住るゞ
今年已よ十九歳よいろ。眉目清雅よして世よとゞんする美男ふて。在五
中將の若盛もかくぞありけめとゝいて程なりゝ。若年なれども生つきて
物かるゝ。琴女おりて都近きに住ゞ。ゆめ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝ目もやゞ。花柳
の街よいざゝふ者ありといゞ。あしゝ方ゝ足どんひけど。明暮文武の道と
学ぶ支よのゝ心とゆゞねうゝ師よつきて其業も漸く通達したゝゝ。

鳳来堂蔵

家僕弓助も又生得老実なる者ゆゑ朝夕まめやかに仕へぬ。磯之丞
家にあるときは他の更へせず一向骨を読或い木太刀にて弓助と相人よ
剣術をならはしかどもかどーるに。自然弓助も其業をおぼえ。扨一日磯之丞
師のもとへ行て夜道を歩りける折しも。月のいとさやけかりけるを。道と
更て男山八幡の社すぐまのりる。そもく此所社い清和天皇貞観元
年八月。和州大安寺の僧行教とゝ豊前宇佐の社より請て示現と
うつり奏聞して。當山鳩峯より勧請したるよ。香水窟より涌出し
ゆゑに岩清水とかづけたるゝ。山下の人家軒とゝべ和光の塵も濁江の
河水よりむしろづ。げーも生るゝ故つゝく深き誓もあらたゆゑ月の
かゝの男山さやけき影い呼ぐ。木ぐくの紅葉も脱そゝゆて。日もかげろふの

岩清水苔の衣も妙なれべとうの袂よ影うつるゝしの箱をさむなり。
法の神宮寺。げふのぐゝに霊地なり。岩松をぐゝて山聳。谷めぐりて
諸水枝とつゝ流。いと神さびたる鳩の峯越来てゝれば三千世界もこも
るゝぞ。千里もおかゝ月の夜の。めけの玉垣みとしろの錦うけまくも
かしこけなゝと伏拝て禁の野辺よ出るに千草の花盛わして色と
うぐう露とふくゝて虫の音まぐも心のりげり。頃しも七月盂蘭盆の
ゝに多りれば。此呼彼呼わ高灯籠とり。寺ぐすい灯籠の鍋物或へ
花鳥或ハ草木。さゝぐ志からゝく造りゝて。其裏よ灯火ととりて
かけつゝ流。其光り恰も白日のごとくゝり。又そんゝの塚よりゝ聖霊と
むらゝるゝて。手毎よ灯籠と提てゆゝ人ゝ。磯之丞いもらく

うなることあるこの寺院より立ちて灯籠と一覧し。おりえぶと時どうしてくるぶ。
往来人も稀なり。寺々の灯火も消て物音もあづかりなんぬ。ら飯ら
だやとおりひいそびゆくるふ。年のころあひ土二歳とおぼしき。斬禿の
女の童容貌きよらふいゆゝかしげるが。羅ちらつる牡丹の花の灯籠
と提て唯一箇来り。磯之丞より對ひていふゆう。妾い奴近きめるりよ宮仕へ
んづる者あるが。今霄吳迎の馬其墓よまゝぞはるふ。途中にて見しる
人と見失ひ幼身の夜道なれば何とゝ物おそろしうて。道の案内ハ
もちなゞし。独敢なにやとい。こゝ思ねがいくい君妾とちりあひて。住家ハ送り
たまるまじや。馴くしに者とおぼさんがせんめさるさに願いと。いとかしこく
いつるけそびいふも難義の体なれば。磯之丞不便よちひ。我も飯路をいそぐ

なれど。さまで遠かるぬ道なるべいにもおろまのうちをべしといふ女の童なて。
君いづれの方へ飯りなるやといふ。磯之丞山崎の方へ飯るうしなるぞ。
おろうばおろうなるも順路なりといふぞ。はひよ相伴ひてゆくぬ。さて
草深き野道をゆくこと十四五町ばかりふして。ちこゝおくまりて松杉の
一むらおぼうたる所にいるり。女の童のいるる哭こそ妾が宮仕まるゝもる
所なり。苦しかるれば此方よ到りなりて。おぼゝ通のつるをもたり
なひてんやといひて道すて。冠木門の裏よ通らし。一間の坐敷よ君ちて。
彼牡丹の灯籠を軒端よりけあきて。おのれい奥の方よゆくぬ。磯之丞
四辺を見まいをふ。やごとなき人の設とおぼえて。翠簾をたれ蔀をゞし。
金地の絵障子朱様干。菊灯臺の火影ハうちなれど。さやけき月のさし

いろに輝合てぞ見えたりける。庭の景色もすべてあらぬさま遣水のなりもふ
そめて。白き真砂きよらふいろ〳〵の蒔石木の間乃石灯籠おのづから
る風情あり。柴垣ひたいゆひなるあくふ女郎花今をさかりふ咲乱て。ちら〳〵
いろの露ふきあれさるさゑ。月の光みるゑゐ〳〵見えて。誰蒔栗のいろゆやと
疑れぬれば。いよ〳〵貴族の別業ちゝめとぞ思ひける。さるゆとも奴年月ちか〳〵
往来もるにかゝる歟のありとだゑ。ちゝざることのいぶり〳〵さゑ。幼者の案内
まて。ゆゑもなく奴よ入長居せんハおそれあり。賊ありあんとあゆ〳〵とうけ
ざるらふ。さ〳〵飯らぢやとゆひ使。已よ身を起〳〵るさに。やよ志だし
ちゞもしせたまへと色らけて。輿乃ろ〳〵さしり。若やうにあてる女乃。侍女と
おゞ〳〵きゞ出来りて。近く居ろ。君いまさ〳〵く瑞島の何ゞ〳〵の殿すてへ

おいさぢやとゆふに。磯之丞驚きてゑんゆれば。女打笑ひ。心せれてあ〳〵まし〳〵
きこえたぐらゆふ。ゆぶり〳〵ゆゑ理あり。君奴あるゝを折〳〵ゆにかゝひ
ゆへと妾ゞ仕へまゐらもる姫いつのわぢゆち垣間見たまひ。夜昼となく
意〳〵くおゞ〳〵ひづひゆへ支のやるゝるさに折もあゝば人傳るゝぞ
きこえまゐらせんと。ゆへにゆひありて。今宵女童ゞたゝるぞも伴ひ
まゐらせ〳〵出雲の神の結びたまひたまひんゑに〳〵ゆゝめ。せて一夜ゝも
姫の心を慰めたまひてよ。これい〳〵ある人の果るゞ世といふゆゑありて
あゝさゑに名をあゝさねど。後〳〵いおのづゝ知ゆゑ。ゆゑたてき乃
あゝべ〳〵とふに。磯之丞ハかゝ最媚たる所ゆ。時もとぞまるづきに
ゆゝどゝく飯らぢやとゝゆ心の頻るれば。僕ゞ〳〵賤身をさぢゝり

深くおぢ〜たまふる浮志をいかとナそれおそれども。今宵ハさうぞくの
事のきづれば。そく飯〜あらんち〜又の日糸りそおん志ふ報ひいべし〜。と
云捨て立んとせし〜折〜も。彼方の翠簾の裏ゝう。錦の頸綜を結
真紅の綬紐をつけうる猫。びたまにつけうる鈴と。今〜とゐ〜しつく
走り来て。磯之丞が袴のあたりをくわへて引とゞむ時に又侍女とおぢき
女両個出来て。翠簾を捲上うれ。几帳のかげ〜ゝ。でりかくやぎうよ
美丽姫。前の女童をつれてちづやうに歩出振袖を口にくわへうの
いひさげるんど。むづ〜さにちでまゐくさるゐり磯之丞とれを熟見るに年の
ころひ二八ぢうとおが〜し〜。山吹色の濃よ遣水よ蜻蛉乃乗ふさゐを
摺箔ふ〜たる袷衣を著て白地の錦の帯を結び。髪の餝衣裳の

好と總今様ふめ〜ど。古代めかうる打扮なれど。其容の艶麗なるハ亦又
類あるべ〜ともおがえぢ。巫女庵乃花乃夢の裏に残まるがおとゝ。昭君村
の柳も雨の外よ疎なるに似うを。磯之丞ハ初て物ゝうに氣質なりをを
いうある美人を見るとも心とゝもむ爲さ者うハめうねど。怪哉此姫を見ると
ひとし〜く。身上冷るだりにおがえて。ゆる美女も亦にあるめゝとおもひはて。
魂乗心うかとて。ぢうゝとさへもむるちひなくくちまどのて。現心もなく
かうゐるに侍女寺姫にむうひ。日来こひ〜しとおが〜したまひ〜殿のたゝうぢも
来りたまひぬ。さぞかうれ〜ミおがとらちとゝへべ姫ハ喜びの色外皆よゆまんど。
小〜むぢ〜ひゆよけをひ秋霧よかをを見てゆる月影の風情あり。磯之丞ハ
荒心まどひ。前後と顧るおんをゝり紙忘れて飯るべき念をうしゐうる。

侍女等其けしきを見て奥の間よりざうひんれいと女の童黒棚をそなへる。美酒嘉肴とをこび。むたしー盃とめぐらしーるが侍女りくるい館いかくひろくれこも。ゆゑあるて垂をあのびたまへ侍身うれば我輩乃外よかしーばきまゐつもる者かしーさんが心とあきたまひぞゆるくー明ーたまへといひけく。心して皆退き出るんべ姫ハえぢらひあぐーる。磯之丞が手を携て閨房ゑ伴ゑそうだきの薫をあーぐ。螺鈿とちりばめたる二階乃厨子にあれるべくる。文臺香器草紙物語繪文車。貝桶のたぐひとべてるか古代の物かしーて。垂に似どりみーーく見ゆるべ張文正が遊仙窟乃趣と目下ふ見れそちーて人間の外ゑ到るかといぶらしむをりなり。時ゑ姫顔ゆるたく。今宵かく逢まゐすることハ実ゑそひまりけざる夏まて夢現ともわきく

こくこそゆく。月の下まて神ぐーの結ひたまひー紅薄。顔風ハあーくこも。葉におく露をふうすて。かーーぎかりゐゐるきこゆれが磯之丞。ざるにても君いづまの時いづまの所わて我とゐんちりゐひーやと尋ゐれば。姫うち笑ひ。君ハ実ゐ知りゐんはじいづやや侍女等にもーあられて。岩清水ゑまーでー折かり放生川の辺まて偶君と見まゐーせてーり。憑の重荷と負そあく。露忘るひまもなく。そこゐ心ハ深草の独伏見乃鶉るぐ。なるゐ日ゐるこがれまゐーーせーー秋哀ゐる見ゐんるべ磯之丞ハひとそれりるくおゐえて。秋の後の長きも今宵ハ短きこちーて。こもに卧ゐそるべハ芭の鳥ゑ打おどろろされて起めれば姫ハ深く引きとをーく。妾ハ世をそのぶ身ふーゐるべ。山本の神なく孫ぐも昼ハぐりあり。夜ハいつくそも苦しーかり紛べ。まうさも

瑤島
磯之丞
幽冥の
人ホ
会を

其二

磯之丞が家僕
弓助が
目よ
こころを
ぬぐく

通ひあいれかしとのひて。名殘おしげに送りいでれば。磯之丞は夜のあけ
ぬうちにとりそぐて山崎の住家へ歸り。昨夜は師のもとにて。物語
よろづ夜をあかし。彼所へ一宿したりと弓助はいひきぬ。かくて
磯之丞家へ歸りても其面影の忘られず。夢をたゞ移り香は身へ
ちでまり。睦語は耳に殘り。其人の今を身ふそくこちらして。あく／＼たゝ
れば。其次の夜もまた助は。師のもとへ去とりて彼所へ。終夜
ちぎりをなすがこれとり暮ふかに曉に歸り。七日ばかりの間連夜彼所へ
ゆきて。一夜も家にあることなく。已ふして七月のもゝに到りぬ弓助がもと
へ。日来物がたりに侍方なれどさとぶ独森のさみしさに。傾城白拍子
などに通ひあふにこそあらんと。始のかたちをかへたりしが。頃日のうるさい

よろづ現ずに体をとびくすいぶりして。一夜磯之丞がゆくへに見え隠
つゝて彼所へいでゝ。やがて門内へ入るに。誰とがむる者もなく寂寞として
物音なし。磯之丞は奥の方に入るに。紫垣のひなびたる闌見るに。館の
体磯之丞が目に見ゆる所とは大へ変り。軒端かたむき。柱歪。翠簾破れ
都ぶれ壁かち。床腐て。葛葛とはまとひ。蓮生茂り。庭のさゝもの
とに伏まはて。遺水へ落葉ふりかゝれて石灯籠へ草深き裏よりなれて
苔むしぬ。唯女郎花の盛なるのみ詠ぬる様なり。軒端へ牡丹の灯籠を
かけるる坐敷へ。荒席ちきて。灯臺のもとに磯之丞一具の骸骨ふし
とゝのへて居たり。其傍辺へ三つの骸骨あり。又ちいさき婢子人のごとくへ
團扇を把て磯之丞とおぼしき居たり。磯之丞何やらんものいへば。骸骨手足

うぢん 髑髏うなづきて。口とおがーき呼ろこゑひぐれいぞ〳〵物語も。菓子
樣の物を華飾に盛蓮の飯とおがーんを新〳〵折敷よ盛又ハ銅の佛
器よ水をたゝへ。檜の葉をそゝぐなどとおきさうべてかくらーの三つの骸骨
磯之丞とりてゐを樣ゆて。起居まぞすべて生る人のごゝにもゝさまぬ。
弓助ハ吳体を見て杣ゝとゝ大ふ驚き。かゝゝ見ゝぞけがやとゝひけく。
身とゝのびてぞ居ゝるる。磯之丞いかゝる事ゝゝ露ゝゝぞ。仏器の水い
醋酒を酌ゝちゝ。蓮の飯も美味かる香とゝひて。一向入臭の樣子
ゆて。扇りて膝を打拍子ゝるて。

野草花をおびて蜀錦とつゝ孫桂林雨とゝるて松風とゝゝぶ
とゝゝひ餘念なゝ体ゆて居ゝるる折ゝ。彼牡丹灯籠の灯火の

光とゝゝひて。蝶三ツ四ツ集り。灯籠のわゝりと飛めぐりて。真の牡丹よ戯る
ゞ如くなりゝるれ。やゞて手飼の猫走来りて拄よかけのゞり。蝶をめゞけて狂
ける。忽冷風さと吹れて。灯籠の火と消れバ蝶もいづくにゝる飛去。猫も
走りて退ぬ。時よ三人の待女等ゝれを見て驚きさゝるさゝにて。わふわくや
以方と闘ふ者ゆりとかゞゝんひとゝゝば。姫い打ゝれて涙をゝゝと落し。
磯之丞よ對ひていひるゝ。今宵ハさゝるゝとゝゞれバ君とゝゝに宿ゝまゝ
するゝとゝゝゝ。名残ハをゝくゝへゝゝく皈りなまゝ是ゝゝゝゝゝゝゝゝ
磯之丞ハ侍女等がいひるゝこゝゝゝ耳ふゝゝゝゝゝゝ。姫ゝゝゝゝゝゝ心変
ゆやゝゝんとゝひたゞくゝゝ大ふ不真ゝ。腹立顔よおゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乞ゞにせゞ走り出るゞ。跡ゝ姫をゝゞめ皆同音よ。まゝゝ呼びて

倒伏ぬ磯之丞ハさゝる夏もあらじと。さても人の心ハ変やすきものよとうら
恨て帰路と急ぎれば弓助も其跡よりでゝ家に帰りぬ。扨磯之丞
帰りても心さわぐ。胸の火とゝやー居るに弓助そばちかくよりて
ゝる頃日乃沙行跡現ずた体よおいたのゝるゝ時姿痩細たまふ
足ゆれば最怪く存。今宵あん跡をもうひまのりて覗まうるよ。今様ゝ
体にいとおのれが見たる所とつぶさにつげて。全く妖怪の所為よ疑ひ
いとゝいへば磯之丞これを聞いたゝーく。夢の醒られてもちして大よ驚き。備ハ
我狐狸野猫の為よまうふさをしーう。さもゆゝしどんば冥府の鬼よ舎せー
ゝうんといひて。彼所よゆんそうろう始終をくゝーく語るに弓助これを
きく。彼所いでゝとおがーいぞとうぬ。我いでゝとゝ。ゆう

だやとゝうふ心さへ起るべ自然足むうひて彼所よ到ゝとゝうふゆゑ。弓助ハ益怪ミ
彼所ハ志水とゝうふ所ゆてゆとゝうふば扨ハ左様よゆりうる。何ふゆゑ明朝決
とゝもに彼所よゆん。妖怪の原を探るべゝ。我共ハ仮よらずとゝうふ。つひハ
一命を棄るべゝ。ゝうう志を猛くして妖よ勝よまくべゝうぞとゝうひて。其夜ハ且
村伏るゝ。ゝうぞゝゆりて。磯之丞ハ桃上よ立る屏風を。さらりとゝうる音の
去るゆゑ。目をひらきてゝうるよ。消ゝうてゝうさ灯盞のゆげハ立たるよ
正ゝく彼雄なり。磯之丞ハ心の裏よ妖怪ぞゝゝ此よ来ること幸ひなり。
只一打とゝうひて刀をとり。鍔元をゝうろげてうゆびハ居るに。雄ハくゝその
心を知るゆゑ。涙を滝のごとくにおとゝしてゝうひうゝ。さぞゝうり怪をあがゝ
ゝうゆも理なり。今ハてまゝど我身の上を詳よ語ゝうりさぞゝうぞと。

こうまでまろいなり。其妻とりもち妻婆よ在しこそ。おん身の妻なり。おん身へ前生して妻が夫なり。人皇五十一代平城天皇の御時よ。小野頼風といふ人へ則おん身の前生ゆて女郎花といふ女へ妻ぐ支なり。妻御身の妻となり京よ住て夫婦なりむつまじく連そひゐるよ。おん身蘭とうつゝ嬖女と召仕ゐひ其女妻を憎てさまゞ〳〵讒言をきこえ思ひに。おん身妻とうそをゐひて。志水なる別業よ押籠ゐひ唯三人の侍女のみとつけおきゐひて。音信ぜふ志ゝぬ。つひよ蘭を本妻となしたまふ。妻其支を嘆て祈さうゝめしさにうくぞ。放生川のもとよ身をなげて死しまうんぬ。然よおん身ゆゝ〳〵蘭ぐ讒言をきこえしこゝ以暁知たまふ。恥おがして。妻ぐ非命よ死しなると憐たまふ。鬼角して妻ぐむ色と骸と

索出したまひて。一ッの塚よつき籠たまふ。蘭とゞ追退たまひぬ。又の年の秋妻ぐ塚より。一本の草を生じて花咲たり。妻身と沈し時茶鑪かさねの衣と脱をてなるぐ朽て此草となりし。ゆゑに其花黄よ咲ぬ。世の人やさしきさ花なりとて。乳女郎花とよびぬ。これ妻ぐ闇浮を憑しくおりし魂魄。此草ゆ還着して生出しなり。おん身妻をゆゝしくおがし。塚よまうでく彼花のもとにてうたまのるに。妻ぐ恨花よ残り。ようそひのへば靡のこ。立退たまへばりこのごゝ。おのづゝ恨む風情をかしゝるぐ。おん身うれ哀ものさとちいとりゐひ。むざんやな我ゆゑにうゝ水の泡ときえて。ひとつる身となりしこゝ。ひとくよ我科ぞうし。ちうし浮世よ住ぬまでとあきしめたまひ。おがし道よるうんとおがしきうて。つひに放生川よ飛りて

むなしくかりのいとをとりあげて。こゝに土中に籠しこり。妾が塚を女塚といひ。おん身の塚を男塚とぞいひ。男山とぞ人名もおこり。彼川を涙川とぞいひそめしなり。哭よりして貫之も男山の昔をとひて。女郎花の一時をねるを書し水茎の。あとの世までもあつかるべし。邪婦の悪鬼い身を責て。其念力の道をさしに劔の山の上ふ。意しきを浄身の姿ゆとた。嬉しやとちいてゆのがれハ劔ハ身を通し盤石い骨を碎き。語るさへ恐おそろしに劔の枝のたもむまで。罪のあるさいかぶりう。種くの呵責をうけたること今ちへハ已よ数百年におよぶ。地獄中よりとゝいワづらよ十年たりのこちせり。近来ゆ〳〵閻魔王の赦をうけて。婆婆よ往来することを得えんハ。盂蘭盆の時を幸に姿を現してゆひまゝせ。年来の執著ハ念を露なりうとしぬ。然るに宵の程我くゞ本体と他の人よりられ。あゝ。

やゆひまゝもる夏なりがゝ。三人の侍女等い妾が身を投しとゝ。悲しのあまりに共よ入水して。其魂魄今よ於て妾よ仕へいゝ女童い妾が亡よのとゝめたゝ婢子の精のてゝ。酒肴となりてもゝあまゝせたるハ。志水の正法寺に於て妾が灵よとかゝる手向の水蓮の飯めたゞいふく。もべて清き物なり。穢きる物おゞゝもひて。牡丹灯も彼寺ゝ塚よかけあゝ物なり。我くゞ本体をうめゝ人ありしゆゑふ冥途の風吹来りて灯火を消ぬ。又汚身と妾が前く生いおん身ハ北猫妾い北猫ふて共よ摂州天王寺の僧坊よ養きしゝ。おん身い常よ経藏を護て経巻を食ハ鼠を制したまひしにより。死後其像を刻て山門の欄間よあく。

猫の門と云ハ是なり。其功徳よりて人間に生と云男子となり。
頼風と生るの。妻ハ常に俗家に往来して魚肉を食仏具を穢せ
罪ふかくして女となり。女郎花と生るて非業に死し。ゐぐく苦悩をうけ
成佛ハ更なり。再人間に生る事を得ど。おん身も非命に死しを
。前〻生の宿果によりて。再人間に生れ出ることなり。さりゐぐく
妻も已に罪障を滅し。時到りて地獄を脱れ近きうち再女に生れて
婆婆に出ることなり。これ偖夫婦と二世の縁ありて又夫婦となる。病因ゆ
ゑなり。其証の為に汝ぢの見合の貝のかくしを
与へ。此貝のかくし根掌の裏に握て生るる者ハ妻ゲ再生とおぐ
たまへと。告てさるとかくしぐ八色の雑に おどろかされて睡を醒し。

枕上に彼貝のかくしのあると見るべ。是正夢なり。貝をとりあげてつ〻〻見るに。
裏の繪様真に古代の物なり。偖ハ我前生ハ小野頼風かと。彼ハ女郎花姫の
霊魂ぞとわりなるう。平城天皇の御時に当ハ今養禄の時に当り。数百年
を経て執著の念滅せざるハ元慮のおよばざる所なり。再生して我妻となるべ
いひしめたるべきと奇異の思ひをなし。彼貝を取をさめ。弓助も睡を醒して
起来れバ不様〻〻と委く語り。主従二人忘水の里に到て彼あるべを
尋ぬるに弓助が目に荒たる館と見えしも正法寺の三昧堂にて炎迦堂
女郎花生茂りて他の草とまじるべ。少し奥の方に昔ひしかる五輪の塔
二つあり。覆の柱に牡丹の灯篭とかけり。礒之丞これとえて。王に こゝとなり。
数百年と経て自己前生の我塚と見るる。和漢其例と云べき事之我身の上と

そひて昔とそひあれば。すぐろふ悲しく
けり。源順女郎花と詠ぜる句は花の色ハ茎る栗のごとし。俗呼で女郎と
ぞいふるとう。後の歌よも。玉ぞれのこそのおかめく女郎花。誰蒔栗の色ぞ咲ら
などとう。漢名と殿醤とふ。本草綱目ニ載る所蘇恭ぶ説ハ花黄うて
ひ。時珍が説ハ花白しとう。花の白きとび俗男倍芝とふ。楽天の詩ニ木蘭曽作
女郎来とふ句あれば。漢士かハ木蘭花とも女郎花とふ。又灵鬼志ニ何文漢の
入也一女子ゆう。容顔美卒死そ。葬して明日其塚と見そバ尽く菊花とある。故ニ
菊花女と名づ。亦女郎花と名づとあれば菊とも女郎花と称ぜるん。是共女郎花
塚の物語と和漢相似る故事ニとハ。孫てゐひ居しぶ我身の上ニ曽る支ハ更ニ
そひ。ぐるんそ。生死流轉の理。凡愚の外ゐる支と感じて家に飯りるとう。

國元より飛脚到来し、父豹大夫が書状を呈す。磯之丞これを読み、名和の館へ召出さんとする事の始終を委く記し、夫よつき汝ともあん目んえいさせべきあひだ。とく〳〵飯國へ帰り、書されハ磯之丞ハ更なり、弓助もいところとび。俄に家財をとりまとめて翌日発足し、磯之丞弓助飛脚の者をゝて三人泊別さして急ぎ飯りぬ。偖も瑞島豹太夫ハ才徳の秀るゝよりて、名和の館へ召出されて高禄をたまわり、臣仕の男女を妻なりて、おのづから家内ゆたかに暮るゝ。磯之丞弓助を具して飯国へ帰るゆゑ、豹太夫夫婦大よろこびにて、頓て決し紙を君長知へ書こんるに、早速磯之丞を面前へ召出されて盃をとり、是より彼を近仕の者へ入てぞつかれる。やがて後ハ物語べきこともなく打過光陰移りて翌年の春の比へ到る。此時足利義政公東山の銀閣へ於て

古器名画を集こんと展覧ちるべきハ催ゐけり。兼て宋及びの名和の家へ傳る名器浮牡丹の香炉を急ぎ都へのぼせべし。展覧をこなゝ速へかへしつかるべきもの厳命をぞくだされる。抑浮牡丹の香炉とハ唐の世へ類ふ〳〵とかへぐ。名和の家へ傳るハ唐常ゐ〳〵ぞ。往古後醍醐天皇名和又太郎長年へたまわり〳〵物ふて。唐の玄宗皇帝楊國忠へ勅し、五嶽乃土を集て香炉へ造らせ、ぐ〳〵宸筆をくだして牡丹花を畫さ其繪を模さしめ青磁へ焼せて楊貴妃へ。貴妃これを驪山の花清宮へ於て常へ愛玩せし物ふて世へ二つなに宝器なり。去程へ長知ハさゐる厳命をかうむり。彼香炉を都へのがとべき用意ゐるに義政公兼て風流文雅と好ませたまふ。つき従ふ臣寺も都是優美の輩なれバ鄙へ育て田夫野人の如き者等を

つらへし。都人の笑となりて家の耻辱なり。殊よ大事の使なれバ物馴さる者よあるべきぞ心あるふぞ共使者ハ豹太夫の外よなしと定られ。豹太夫と召て此事を命ぜられ名ハ豹太夫謹てうけたまはる。大支ろあん使と仰せ付らる事身の面目此上なしと受して退き急ぎ行装とととの。門出を祝して盃とめぐし香炉を受取箱のうへよ錦をおほいして自首よかけ。駕籠に京供人数多召具して発駕ふるふぞ妻八雲ハ恙なく皈国し人といひて門送し。磯之丞ハ弓助と具して二里ばかり送行酒店よ立寄て再又祝酒を酌ふるが豹太夫が懐しろ香の煙のごとく黒気糸と操出ように出て空中に消うせるなぞ。磯之丞これを見て不思議よ思ひ若懐よ袖香炉なぞ仮入らもしと尋ぬれども。左よあるべきふ素豹太夫が目ハ見ること

○浮牡丹香爐圖浮牡丹沈牡丹共世人浮牡丹を知て沈牡丹を知ぬ愚案ふ万宝全書云浮牡丹青磁上手の物水注子あり但入晴ふり浮牡丹ハ内の絵紋ふるとく様にして藥とりける様にゑゆるなり道具鉢皿花生等其外いろ〳〵多し又牡丹手とりあり沈牡丹ふり唐草の枝あり とりかれバ浮牡丹沈牡丹ともに青磁の一種にして香炉よかぎりに万の器あれども唯香炉ハ共名高へ雑劇の所為なし浮牡丹沈牡丹の名あるハ絵紋のなるにより称ふ

あり給へば怪ともあらぬぞ。磯之丞儲ハ我眼かをしてかくりのを見しりとそひ久せど。
鬼角気よかりしるが。張立人よ怪しと告るハかつてまろしからぬとそ心一つよ
とさめてつひに別をの。豹太夫ハ客路よ赴き磯之丞ハ弓助とともに家よ飯りぬ。
爰に亦大鳥嵯峨右衛門ハ出奔して後鳩八堂九郎両人とともふ一所不住よ
月日をおくるが。豹太夫が為よ出世を妨られることを深く遺恨ふらい。
うに折を得て狄仇を報ひべしと心知居るが狄度浮牡丹の香炉を携て
都よのぼると雲これ時節なり。彼奴を打て香炉を奪取バ十分乃幸
ありとおひ鳩八堂九郎等と共あしく合せ。伯州因州乃堺田原巔ふ難所の
茂林の裏よ。三人等くかられて。豹太夫が打過ると今やくと待居ら。豹太夫
ある危支めるべくこ夢ぞもくぞ。急ぎの旅あれバ。狄日夜を篭て田原

巔よ出かりるを待まうけるる嵯峨右衛門。尻ひつくくげ手銃を携て石の地蔵の
肩よのぼり。豹太夫が旅荷物を提灯の光りふそれと見て。覘を定て火門蓋をきれば
手練の筒先あやまらど。撲的響て荷物よ行めてくるふど。供人等一同ふこハ何者
の仕業ぞと騒立る所へ鳩八堂九郎両人等く走下り。斬篭刀の電光よ接
合せる若黨ども。二太刀三太刀戰しが。いぞ敵することあるふべき。数箇手を負て
奴僕輪夫ひろもよ。秋の木の葉の散ごとく。むくくと逃去を一人まのがさと。
鳩八堂九郎等くく跡を慕て追去ぬ嵯峨右衛門ハ彼等ごとハ我手とぐさよ
かくばぞと。寅前まう地蔵の頭ふ尻かけて見物して居るが。仕もなくくうと
飛下り。折しも風ふ雲散て月のきらく氷の刃ごとく接る鎗ゆて。荷物の
戸をひらき。豹太夫が襟首掴て引ぐせバ。豹太夫ハ朱よ浩り。刀の柄を握

つゝてへ居されども。肩のあたりを打貫き即死とせざるべからず。揮扎こと
あたいぞ。嵯峨右衛門と見るうち。怒の牙を鼓うし。苦〳〵し息を吻とつきて。
偖ハ汝が仕業なりあるうち。尋常の勝負ハせぬ。乗道具のだま〳〵打身怯至
極のあるまじと詈れば嵯峨右衛門せら笑汝がごとき雲雀骨。摑ひしぐ安うれ
ども。若ひなられて供の奴原一人も打漏さば後日の害と深き思案の乗道具
遺恨の筒先もひたつるうち。香炉も炎方へ渡れと奪取さく懐中。泥足
ふて面上を踏つけ〳〵踏ふまれ口惜いら死念あるうち。夜ハ入てハ往来稀なる
炎難所これ〳〵汝を一寸試のうぶり斬苦痛をさとる覚悟せよと。胸ぐらとつて
引起し。且片腕を斬おとさんと。已ハ力を振上るハ。豹太夫背後なるハ手探
して駕籠の裏なる白木の箱をとりて。嵯峨右衛門ハ打付るに。箱の裏ハ

数多の蛇出て嵯峨右衛門が懐ハ入或ハ手足ハ黄縁るにぞ。のつと叫び
氣絶して地上ハ撲的倒まとうり。豹太夫〳〵刀を抜て。嵯峨右衛門が
うへハまとうり。吃と撓捕とし〳〵なる呼ハ鳴ハ堂九郎立戻て炎体とな
うり。双方うり豹太夫と一刀ハて斬れば。豹太夫力おとろへどのけうなハ
倒まとうり。九郎八立寄てとでめの刀をさゝんとし〳〵る折〳〵前面り
方〳〵提灯をもうせ。早馬ハて馳来る者ありうるゆゑ。見付られてハ
一大事とのそがい〳〵嵯峨右衛門と肩ハひつゝの。三人ともに行方ちれぞ
なりにうり。偖も磯之丞ハ家ハ帰りても。彼黒氣を見うること免角
心ハ気〳〵。弓助ハとへば彼も見うるとい人殊更頻ハ怪怪〳〵なる
ざれば父の身のうへ氣づかい〳〵。せめて今夜の宿まで追ゆく。終夜

さうをりん
暦寿三年

大鳥嵯峨右衛門
待伏して
手銃と
つるしりて
瑤島
豹太夫
とわり

つきそひて。様子を試見やと。早馬ふて跡を慕ひて吠所よ来う。
且茶物を足つけて大よ驚き馬こう飛下り。弓助よ提灯てこさせて
四辺と見るに。豹太夫地上よ倒きて居るにぞ。大よ仰天し。引起して
見きい朱よ深りて。深手と負ふる様子なり。胸よ手をあてこうるよ。
少しの温きあり。れば急ぎまどひて印篭の醒薬を取出し。馬杓よ
清水を汲薬ときよ口の裏よそそだ入て。弓助あろとを介抱し。耳よ
口あて頻よ呼醒しるに。親子一世の名残とて。死目よあうぐき因縁
あや。息吹こうして目をひらき。何磯之丞とやうた呼へきこうしぞ。
敵ハ大鳥嵯峨右衛門。助太刀ハ鳩八堂九郎両人なり。我兼て彼遺
恨とうこ。若旗中よ於て我を襲ものとこひ。彼が為よ一ひたの

小蛇ハ十騎丈騎の伏勢よまきさうとちひしゆゑ。箱の裏よ数多の
蛇と餌養して携しが。飛道具の忍打せんこひしぞ言語よ
絶たる卑怯者。大切の香炉も彼が為よ奪られぬ。いひ残しこと
数多ありて。苦しうていそれぬと。れと吠声の名残うて。諸行无常の
夜嵐よ。遥きてうろた草の露。峯の猿も鳴そえて。寂滅為楽乃
別霜。消てうろあくなうふくう。時よ怪や豹太夫が懐しう。一道の
黒氣烟のごとくしゆくと立上りて空中よ消失ぬ是乃災の神。画
妖よ誘ひ一両道の烟よつさて。豹太夫と嵯峨右衛門よのうう。
且豹太夫よ災して一道の妖気去うなう。嵯峨右衛門よつさた
災の神ハ。如何なる事とうもん。後々の巻と読得て知べきあう。

此時磯之亟彼妖氣と見て。昼んし黒気果して凶事の前表なれば。
あらしとなりて。死骸をひしとつかみて。悲嘆の涙をむせぶ。弓助も
側に泣伏て居たりしが。何ぞひらん勢こんで跳出しるゆゑ。磯之亟
色とかけ。あれまて弓助汝ハ何方へゆくぞといふれて立戻る。嵯峨右落つ
が跡を追ひけて。捕んと為るを。其方ハ彼が行方を知て
走るか。知ずば何方をあてもなく。蜘手なる此山路。あてなく追い
死盗ん。狼狽呼るゆゑぞ。山中とはいへ夜中なれば。猛獣の愁めをば。
遺骸を片時も爰をあとにがたし。我ハ早く此をあらて護べくんば。
汝ハ急ぎ麓に下り。人と雇て来るべしとふぞ。げに理と聞忽を
恥て禁森に下る。やがて二人の農夫と雇。明松を把して来りぬれば。

磯之亟弓助ともに屍を抱起して亦物に乗しる。こゝに二人の倩人
に擡せ。磯之亟ハ馬上にて禁麓に下り。村長をたのみて亦物をあづけ
おき。弓助と守に附おく。ハ馬と馳て夜通に帰り。此よしを
委しく談に告きこゆる。長知香炉と驚て大に驚
早速かくる支に曾る家士等とうして。豹太夫が屍と見せしむる。
いりにも形道具にて打まし一体をとりとりせば其屍ハ彼が家に送と
桑とさせるに妻ハ雲ハいつも更なり長知の内室に仕る娘八重垣が
嘆きるし尽とべうもなく。偖長知別に使者を以て香炉を
棄まこうる支と。足利家へ通じるに。義政公是をきこしめして。
宝と惜と沙疑あるて。沙不興のしなべ長知甚心を苦しる。

急ぎ家士等に命じて四方に走らせ。嵯峨右衛門が行方と巖づゝ探させ。豹太夫が不慮の横死。跡に残る妻子等も不便しゝ思ひやるべし。やむこゝをえぞ。彼等と召叫足利家への分説なりもてゆく。汝等と共に仕へさしもゝるゝしゝて。豹太夫が田地家財を没収し。八雲殘之丞八重垣等母子三人とをわうぎゝひぶぞせらるゝ。れよりて召仕ふしゝ男女ハ都てかの主ゝが呼縁に依り。唯り助一人何方迚もと附従れば。主従四人住馴る故郷の雲と背後になし。行方ももとゝ客路の塵と眼前に見て。おの〳〵袖と絞て出行ぬ。豹太夫が打もしゝた逃散る従者等ハ。旧ハ堂九郎に斬まて死し。此呼彼呼る尻ぬ出るもあり。或ハ行方知ざるもありるとぞ

第四回　連印鈕號　上回

斯て八雲殘之丞等ハ。何所とて身とゝまるべき所もなく。殊更八雲い此時懐胎ゆてあるれバ。長旅路にあわん事氣づかはしく。前に召仕ふる水草といふ婢女。故郷丹後國に既今ハ夫を持てゝよし。折〳〵音信をいゝゝれば。是を便に且丹後國をとゝろざして去る。歩なれざる女の足のもどゝかねバ日数経てやうゝ〳〵つゝるゝ。水草が夫の名の与三といふ支と其住所成相の観音道とゝゝ兼てゝゝ。村の名と知ゝ。かくる事のあるべしとも探べ。尽しともかゝぬ後悔さよとゝのつて。成相の観音近きゆゝ。水草といふ若き妻持る与三といふものとて尋れとも同名のゝハ

幾人もありとてもとがく。殆尋化て吠彼とさゝやくに。何の所為
あるんの一つの土橋を越て四五町去る。酒食と賣家のあるんば。飢る
臨る折節これ幸と立寄て。四人等く門口に並る覓る尻
かけて休ひ飯のくあつて打喫て四方と顧る。頃しも弥生の初め
なれば。挑櫻咲交て風に音もなる松が枝に。かゝる藤ハ瑤琴に。かゝる
紐とと疑ま。垣に結こむ酴醾の。枝もたわゝに咲乱れて。いと詠める
さゝめなれど心に愁おかるんば。うちなゝふして不言。目もそでめどして
居るうち。ふるに前面の垂柳の下に。牛を傳おさるる糸車陶
芭鶏卵。干大根。袋茶。生魚など。荷鞍に結附るうちふ。いろ〳〵の
小裂とわるゝ。見直に縫る袋と。結さげてあるに八雲齒木

るひ佐。何の心もなく見居るに。其袋の裂のうちに。豹太夫が家の紋
つきるる。熨斗目の裂の縫交てあるゆゑ。目とそでめてるくるまば其外
にも見覚の裂ありて。前方水草に入へる裂でもなんば。さてハと心づき。
酒屋の老女に問ひ。彼呼に傳る牛の主の名ハ何とらふと問るに。
ざこる色して。与二後家の牛なりと答るんば。扨こそと喜び其人い
何方へ行しぞと再問る折しも。一個の女。田舎染の布子の裔と高
かげ。脛巾草鞋を結。髪ハ油気もなく。朱塗の木櫛挿ていと鄙び
るるかるが。前面の綱もたの家より出来ると熟見るに面乃色ハ
るゝ〳〵れど。疑もかゝた水草なれば八雲ハ真途まて仏にあいつるとて。
飛立樣にして。水草ろ〳〵やとゝ入ば。水草ハ吠方の四人と見てゝ

磯之丞
あやまちて
橋の
えん
より
ころび
おち

瑞島
いとの丞
母
ハやくも
いとの
やえ
ちりべ
ら助

いぶかしむるまで。腰屈て。こいちいけぎる事うか。浮慰の旅よしくへ物ちのハぬ浮打扮氣づかしさよとゝバハ雲ハ涙を前よおとして。是ハつゝる物語あれど此でハ委しく語りがたし。そちが住所と尋ねる。たゝ〳〵吠て出會し。我〳〵が幸なりとゝ。桟之丞いゝるハ前かど田人よおゝれ。彼所の土橋の上よて。草鞋の紐とちゝわとゝく誤て取落し。牛の角よかくゝ取て与へしハ今ゝバそちゝゝ。手巾よて顔てゝゝれバ。露むりも心つゝぞゝゝバ。水草ゝゝけもさあり。笠深くうづきゝひしゝゆゝよ。妻も殿ゝハちいゝゝゝぞ。おゝれて吠よ参りしゝ。妻が住家ハゝれゝ一里ばゝりへゝらて。與謝の海近き藻屑村とヤを所よいゝ。ぞ〳〵浮出ゆへゝしとて。弓助が持ゝる荷物を牛よ附て。

其上ハ雲と茶しゝゝれバ弓助ハ飯の價とゝくのひ。身軽よゝりて便ゝゝとてハ重垣と背負。桟之丞ゝゝゝと水草ゝ案内よつきて。彼ゝ住家へ急ぎ行ぬかゝて其所よ到るゝ。名よおゝる海橋立與謝海。眺望无双の濱辺かれぞ。八里遠き荒家の。垣間まゝ〳〵よ軒頽て。時雨も月もさこそ漏らめとゝれゝ。水草ハ家内の塵と打払四人とむゝひ入て。且ハ雲と對ひ。浮物語とゝ〳〵ゝせゝゝと気をせけバ。ハ雲ハ涙と潸然と落して。道とゝ〳〵物語んも人のゝんとおゝれていとぞとて。石生團七ゝ支ゝゝ起て。豹太夫嗟嗟右衛門と果死ゝひよおゝゝる支を姫ゝ。嗟嗟右衛門豹太夫を欺打よゝゝ。浮牡丹乃香少を集其越度よゝゝて母子三人ゝゝゝゝゝゝゝ終りまで委く語り。

我身懐胎の夏とも語りくへ。そちと便よ尋来りといへば。水草ハ是を
宵て且驚き且悲しく。涙よりとて去たり返答もせざりしぶつやありて。
目を抑ひ主人さゐの不慮の仆最期殊更仆家を失ひ人ハ災難
ヤーわぐべき詞もなし。妾が身よりもさまぐるよ。愁る夏のあり〳〵ゆえ。
ひさしく安否をうらぐいぞ。心のれよ怠りぬ。父ハ畑作とりを百姓して。
少〳〵の田地を持つるが。妾が為よ腹がりの兄泥六とヤりの。類なん悪
漢にて。邪非道を夏とりく。屢親よ難義を負せ。其上父よかくしく
田地を殘らず賣代かりの故。父怒て勘當りし。今ハ何方よ居ん
行方さへ知がさし。其後父母打続て亡人の数よ入跡とる者のありぐんば
位牌所を失ふよ恐ひぞ仆暇願ひて去郷よかへり。里又の媒まく。漁士の

三とヤを者と婚よとり。夫婦世渡と助合て打過ぬ。妾さ夏ハ
ヤ上るハ今が初。然るよ夫も又去年の冬病よりて身まり。今ハ
嬶の代暮。線機の業ふて。朝夕立る煙さへ。細き本銭の糸車。
まり兼る所帯よて。藁塩草かりでハ敷物もなく。磯菜より外ハ
進もぐさ物もぐるね。貧家なれども仆遠慮なのがせめその幸ひ仆主
人様の落目際仆厚恩と露程も報ハる時。如何様よしてなりと
おかくまいヤをべーと。真實詞よあり〳〵れて。いとさのりく見えるふぞ。
四人の者ハ安堵して打寛ぎ。水草ホいるハ前方仆奉公らせ
られ。武家よ仕へとする者ハ。武藝と嗜てこそ存せ
ぬ志術奉公のひま〳〵よ。圍七ぞり教と乞。太刀合暴術の一手少て。

学びおきしが今用立。独任の女として侮るべき其お陰。さてかの牛ハ父畑作が。子飼の時より不便をかけて。ひさしく養ひし牛なれば今ハ不用の物なれども。父の遺物とて。今ハ養おきしと。とつぐ語も底意なり。饗應ぶりの間話。幸ひ竹葉も一陶。有合せる芭鷄卵。所がらなる丹後鰤。何ハなりとも尾首をつけてお祝ひかもべしとて。かいぐしく立まはり。酒食を調じて出しける。これハ磯之丞。偶鈎佛壇の裏を見れば。錆る鎌と魚網とそなへ香華手向てありるなぞ。こハ何故と尋ねハ。水草ひいるハ訝ありうべし。あの鎌ハ亡父畑作が手馴し物。九夏の天も畑打腰ハ焼鎌の。暑を忘れ。玄冬の旦も氷る手鎌ハ葦刈の寒さいとゝぬ。菅の。辛苦を

経へる遺留物。又一品ハ夫與三が憂世渡の漁具なり。女ハ似合ぬ業なれど。妻も網を打なれば。共ハ世過を助しが。明暮殺生鱗魚の数を尽して身一つを。たもる哀のつかさよと。ひたぶりて。夫ハまもりて后を浅間敷。管を止。殺生の罪科も海士焼火と消失て。黒縄地獄の網の目と。脱きて佛果を得ようしと。夫の為の罪ゆゑ。我身の為ハ懺悔のもるしかく二品とをなくおたて。朝夕手向る香花も。父と夫ハ仕る意女の愚痴の耻やとゝくバ。四人の者ハこれを知。其志の殊勝さと感嘆して覚えず涙とおこしける。かくて四人の者ハ次日と始さしてあばらく。次家ハちぢまりるが。海士のたく藻の夕煙。身をなくべきハ。わゝ孫ども。住バ所ハる浪の音かしましき海辺。松涛の風芦花の月時ハ。ゆゑもたひゆる。

耳ふるゝを目に見るも。なれぬ住居の鬱悒さと。恐びてかゝる月日見
世に出る時を螢見に常世の濱とゝ人子を。水松かいひに鹹潟弥生も
過て人間の。四月も爰ハ濱風の。寒さとかこつ蕈屏風折焼葦の終夜
臥佗ぬれバものゝ。過来しゝ方の悲しさ。忘るゝひゐも波なゝで千時も
なゝに海士衣。身の秋いろとかゞ〳〵ゝ。藻に住虫の我〳〵と音をのゝ鳴わ
つ。只水草が誠心と尽してまめやかに住ると。沖漕舟の楫とかりひて。
憂日と爰に過しゝ。偖一日八雲磯之亟を迎づけてひるゝハ君父乃雛言
に共に天と戴ぎゝ語ひも定て知ゝん。ゝるゝに日とおらゞきに
あゝど。嵯峨右衛門が行方香炉の有所。居ゝ知べきいまなし。ゝゝ
旅路に出立せよとゝふに。磯之亟命ゝべなり。父母の讐に居ること。苦に

寐ず桃とし不仕とゝせバ一日も安閑と暮を心ハかくゝへ。浮
懐胎の体に身と氣づゝ。鬼角出ゝに八雲いゝ。我身に
八重垣つゝ從居ゝに。水草ハ男まさりの女なれバ。何支ありとも
氣づゝなし。我若かゝる身に成ゝ。共に旅路に出立て女ゝ
嵯峨右衛門と一太刀恨て。匹夫の霊に手向ゝゝ。折ゝく
ゝゝぬ身なれば。ゝゝかゝ。急ぎ旅の用意せよと
ゝべ弓助傍にありて磯之亟に。君ハ京においして嵯峨右衛門を
見知りゝまし。拙者ハ行國元へ使の折〳〵。彼が面を〳〵見知り。
越八堂九郎寺両人に見覚えあれバ。ゝゝまでもあん供して。浮牡丹
望とゝげさせまゝゝべしとゝふ。磯之亟いゝ。我も幸にして國元へ

中叙せしとぞ。彼等三人とも見おぼえおきぬとゝ八雲又いとく。
弓勝を供ゝ連ゆく我も大ゝ安堵かり。扶度旅ゝ赴りゝ。母ゆゝ
妹ゆゝともろ〳〵を。我等ゝ心ひゝくられゝば。おのゞ〳〵気おくれ
もべし。唯讐を復しそ灵竜を慰し。香殖と得て家再興を肝要
なれ。汞身の上を心ゝかけ。支とも遂ゞ半途ゝ。若も飯ゝ其時ハ。
勘当なるぞゝ思へとゝて。志を励もれば。磯之丞いとく。いち〳〵
かしこまりけり。かなゝぞおん心を悩しゝことなれ。その御
教訓ゞ我為の鎧。腹巻。擘手。脚楯。忠とゝ字を焼鑿とし。孝と
ゝ字を戟とし。たとゝ敵鉄城ゝ篭石門ゝかくるとも。一念の誠を
以てたゞゝいゞ。頓て首ゝ提て立飯り。父灵竜の恨をもらし。

世人の行心を安んぞゞ〳〵と。拳とゝ〳〵握ゝ勢こゝてゝひゝくれが。
八雲ハ喜びゝさぞよゝ〳〵くさるゝさまゝ〳〵ゝろざゝゝめゝざれが。本望ゝを
達ゝ〳〵ぞゝ。さりなゞ〳〵旅ゝ過ゝる哀ハなゝ。況平ゝゞ〳〵と當もちゝ。
ゝとゝゝ限りもちれぬ旅ゝれゝ。さぞ憂支のおゝゝめ。深山路ゝ行暮て。
苔の莚ゝ露を敷。遠き野原ゝ分化て。草の枕ゝ霜を結ふ。煙りの
蓑ゝ雨の笠塵ゞむ脛巾。破草鞋。想像さへ憂物ゝ。すゝめてゆゝを
母の氣を推量せゝとゝひさゝ〳〵て。面ゝおゝゝ袖垣。ひまゝゝ漏る
秋の露勇を詞ひゝゝ〳〵て。涙ゝゝゝゝ磯之丞ハ是ゝ女ゝゝ。母の
慈愛ゝ感嘆ゝ。胸せゝゝて不言。只ゝつむゝて居ゝゝゝ。水草も
傍ゝゝゝて。田上さゝゝ八重垣さゝゝの支ハ。かゝゝゞゞ気づひたゝゝゝか。

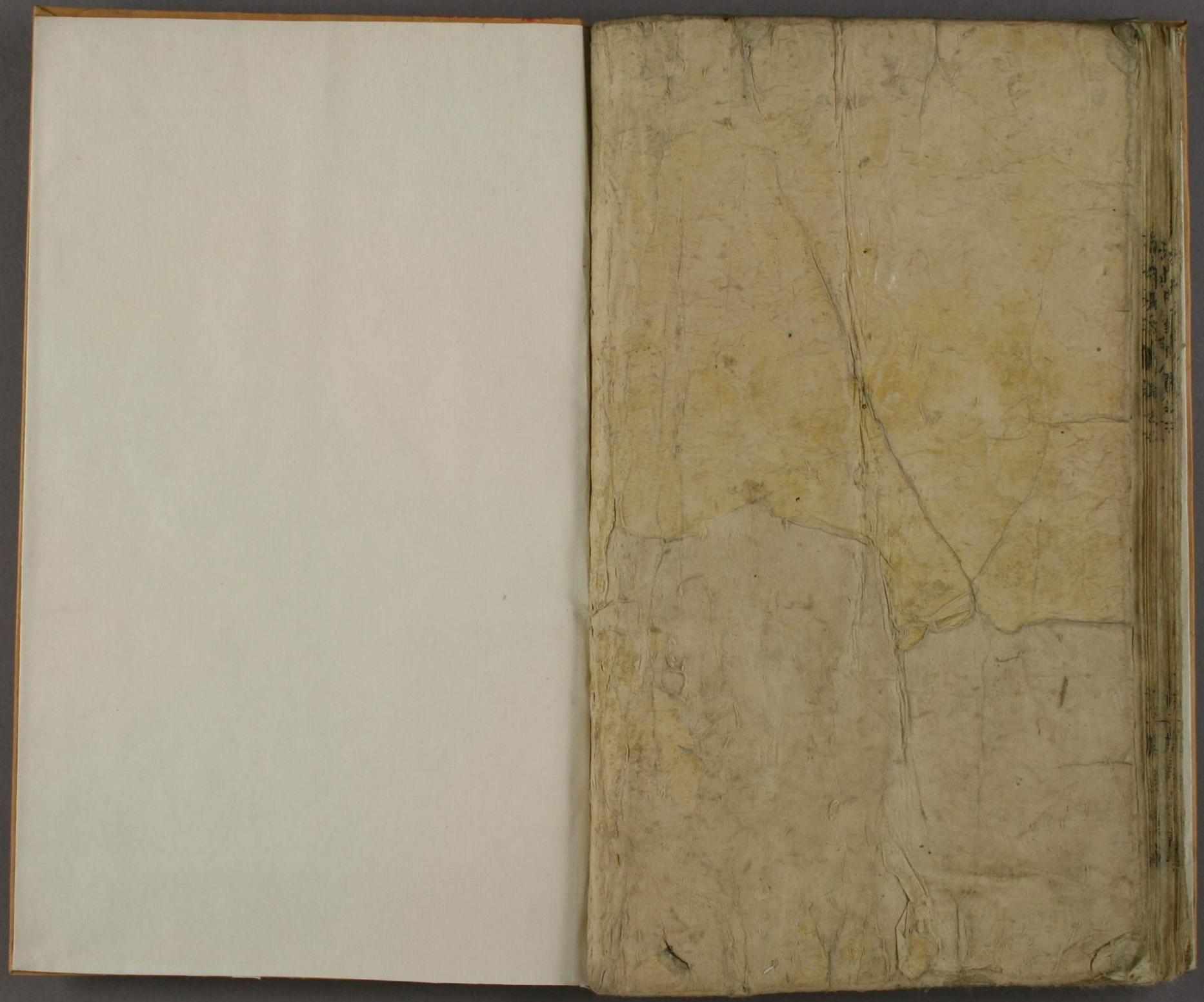
只御身恙なく御本望をとげ給ひ。まめく御敵国許への侍るとならバ。八重垣もともに詞をそへ給ふぞ。磯之丞ハをさな心を決し泣く。行装をそのくするが。不慮に故郷を追出されバ。貯も薄けれど。これを二つにわかちて。一分ハ水草にかづけて母の小づかひ銀とし。一分をそなたの路銀となして携るに。八雲一腰の刀を出し。これハ主君より給ふ太夫どのに賜りし。千手院力王の名作なり。父の遺物の竟なれバ。今より是を汝が差料とし。これまでの汝が差料ハ別に携へて。若路銀の尽るときハ。賣代なしてつかへよとて一腰をあたへられバ。磯之丞押戴てよりとらせ。備吉日をえらび。酒酌かハして門出を祝ひ。弓助を具して発足し。

何所といふ当もなけれバ。且都の方へ心ざしぬ。かくて後水草ハ。塩汲蜑の手傳して。わづかの代に身をつなげバ。頭を梳るひまもなく。髪ハ藻屑とみだれ乱し。夜ハ布織て寐ざれバ。糸より細く痩枯て。垢づく肌の針目衣。奈具里の井を汲てハ。衣を失ひて家路まどひし天乙女のうちせられ。八峠山の黒を刈てハ。藭佬て哀をもよほし。津志王の昔を云。流しのめの積礫も浅き鍋古折敷ならずに麦の欠茶碗さへぬぐひある貧さをえせどとても紙衾葦の穂綿もわとろびて。つゞれひゝ孫し所帯なれど。千辛万苦といとひもなく二人を養ふ誠心ハ。やさしくも又哀なり。八雲八重垣寺ハこれと見るにものびぞ。我々かくいくづれに暮してハ。くつて退屈ならふなれバ。徒然を慰る為にといひなして。母子なるま

糸とり苧を績て。少しも足よなれうしと。ろくど仕馴め業あれば。たゞ
ちくもあるべし。一日八雲後方の縛壁押上て。海面を見渡して。

與謝海塩干よ遠き月影のまとゐしの江よもゐざめやい

かく詠じて。ゑづゝ心と慰ぬ。かくて又ちぐ〳〵く月日とおくりるに八雲い
よ〳〵ゆゑぬ身あるゝへよ。さるゝの苦とつとるゆゑあや。病の床よ臥て悩れば。
八重垣水草諸共よ枕方後方よつたをめて。終日終夜看病よ油断なく。
医者とむらへて薬とを。療治よ心と尽しゝるゞ薬石の験も見えぞ。めめも
もくまぞ痩ゐとりて。日よ異よおりく病まさり。ろ急りまつべうも見へざりゝ

浮牡丹全傳巻之二終

八雲御抄